

連載

哲也製

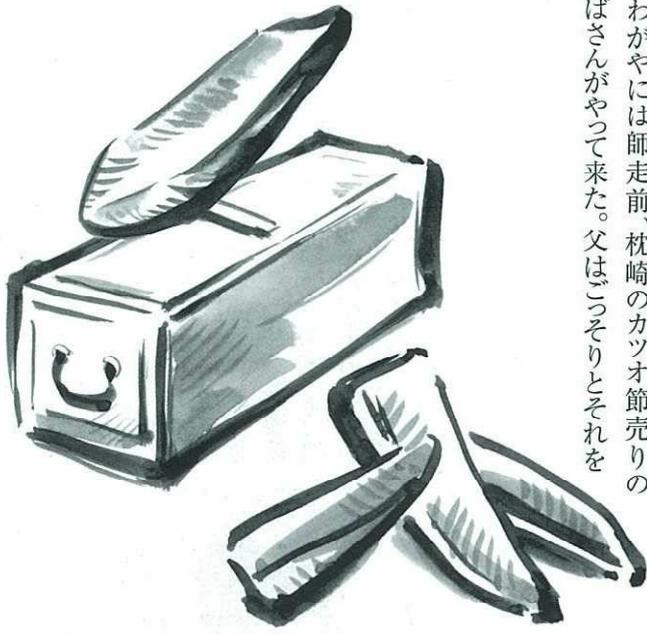
say

かごしま

心の特産品

子供の頃、カツオ節削りは私の日課だった。大工道具の大ぶりの鉋でしこしこ削るのだ。私は削り方が下手で、本枯れは粉々になるし、生節はいつも刺身のようになった。削るのより、鉋の刃の調整に時間を食われたし、それがまた面白かった。そして私の削ったカツオ節の本体は、いつしか片方が切り出しナイフのように尖っていた。へそ曲りなのだろう。そういえば、習字の時の私の墨もひとつとして真っ直ぐ摺り下されることはなく、いつも無残に斜めっていた。

わがやには師走前、枕崎のカツオ節売りのおばさんがやって来た。父は「ごそりとそれを



買上げた。そして喜ぶおばさんを相手に、世間話をするのがとても嬉しそうだった。

彼女はお茶をすすりながら、私に五円玉をくれることがあった。カライモ飴が一個一円、スズメノタマゴが一個五十銭の時代だ。私には五円玉の文様の稲穂が、なぜか波の穂に見えた。私はお返しに、彼女の真似をするのが得意だった。姉さんかぶりをして竹カゴを背負い、あの独特の言い回しで、「カアツオブシヤ イランカネエ」と叫ぶのだ。

カツオ節の婦人行商がさかんになったのは、明治期の黒島流れからだ。

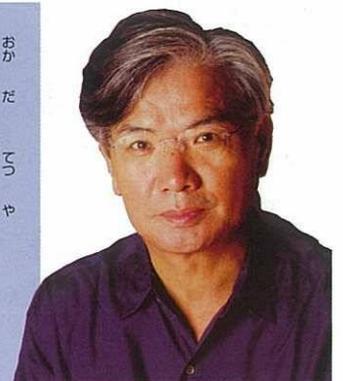
台風で五百人を超す漁師たちが犠牲となり、おびただしい死体が、海のむこうの黒島の海岸に打ち上げられたという。夫を亡くし、途方に暮れた夫人たちは、カツオ節を売り歩いて生計を立てるようになった。多い時は、四百人も商行商婦人がいたという。

むろん、男が狩りや漁をして、女がそれを売りさばくのはよくある形だ。だがそれにしても、この人たちのたくましさはどうだ。

名物や銘品に隠された物語というものは、やわな思い付きやこれ見よがしの宣伝や口車はない、本当の人間の風味を感じさせてくれる。彼女たちは笑いつつ、カツオ節を売った。カツオ節は売っても、けっして自分の悲劇を売り物にはしなかった。

のるかそるか、生きるか死ぬかの現実があつて、はじめてささやかな物語が生まれるのだ。なによりも鱈群を追う漁師たちが、イタコ一枚下は地獄の世界に生きている。

第五回 カツオ節への捧げ歌



おかだ てつや
岡田 哲也

1947年、出水市生まれ。東京大学中退。詩集「海の陽山の陰」「にっぽん子守唄」、現代詩人文庫「岡田哲也集」、エッセイ集に「不知火紀行」「夢のつぎ」など多数。
近著の物語「川がき 夏」が好評発売中
南日本文学賞受賞。
平成4年度県芸術奨励賞受賞。

今年、枕崎のカツオ節業界は、カツオの高騰でひどい目に遭っている。しかし、求められるがゆえに足りず、愛されるがゆえに高くなっているのは、まだ脈がある。カツオ節、バックだつて、安すぎる。

私は子ども時分、行商のおばさんに「マンガレ マンガレ」と言っていたそう。マンガレとは、ガンバレのことだ。私は枕崎の人々に、この世界的なカツオのシケをうまく乗り切るよう、「キバランカイ マンガレ」と呟きかけるだけだ。

ところで、私はパスタを作る時、必ず枕崎のカツオの塩辛を使う。アンチョビーがわりだが、これがなんともいえず旨い。タイムの香りともよく合う。是非、皆さんもおためしください。